贋作幽霊待合室

tontokaimo39

贋作幽霊待合室

「ねえ、今度O県へ出張でしょう、連れてってくれない？」
「おい仕事だぜ、それにO県と言ってもO市じゃ無いんだ、B市の警察署だがそこはO県の東端だからな」
「だから頼んでるのよ、仕事の邪魔はしないわ、そのB市が実家の友人がいるのよ、『私一時帰省するのだけど、夕子一緒に行かない、B市を案内するわ』と言うことなの、彼女の帰省ちょうど恭一の出張と同じ日よ、講座の教授が海外出張でしばらく休講、だから二人とも暇になるってわけ」
「そうか、それなら一緒に行こう」
「あのね恭一、一緒に行くのと連れてってもらうのは違うのよ、一緒と言うのは単なる同行、誰かに連れてってもらう以上は旅費や宿泊費は当然連れて

ってくれるお方が！」
「おい！出張旅費がどんなものか知ってるのか？」
「フフ冗談よ、恭一の財布の中身ぐらい分かってるわ」

と言う次第で、私たち三人は新幹線でO市に向かった、夕子の友人だと言う岸上翔子は留年の夕子より一つ歳下だが可愛いだけでなくなかなかしっかりしている、車中ではB市についていろいろと教えてくれた。
「焼き物の町よね、焼き物と言ってもタコ焼きやタイ焼きじゃ無いわよ、あっ、お好み焼きが少し有名になってるけど、宇野さんってお好み焼きが似合いそう」
「おい、どう言う意味だ…」

「本当はね、陶器とレンガ、陶器の方は日本三大古窯の一つとされてる伝統的な焼き物、レンガは耐火煉瓦と言って溶鉱炉など高温になるところで使われる特殊なレンガ、ただこの方は今ではすっかり寂れてしまってる、付近の山で掘られてた原料がもう底をついたのね」

翔子の実家はこのレンガ作りが最も盛んだったM地区だと言う。

「私は知らないけど、最盛期は町中が活気に溢れ、大相撲や人気歌手を呼ぶほどだったと言うわ、駅には急行列車が停車し駅弁が売られていたそうなの、それが今では谷間の小駅になってしまってるの」

O駅で二人に別れた、同じ市内でありながら私の行くB署はJRAK線で市内のI地区へ、翔子の実

家M地区にはＪＲのＳＹ線に乗り換えなければならないのだ。

「うん？夕子もう帰ってたのか？」

「私の家に泊まればいいのに、でもやっぱりお二人さんだけの方がいいのね…フフフ」と言うわけで、M地区に二人の宿を取ってもらっていたのだ。

「翔子の実家からね、『至急車がいる、すぐ帰れ』って携帯が入ったの、『ごめん、でも何も心配事では無かったから』って今メールを受けたところ」

「そうか、でどうだったこの町の印象は？」

「面白かったわ、はいこれ、恭一の」

「何だ？これ…」

「見ての通り、牛よ」

「うん？」

「びっくりしたわ、牛の神様ってのがあってね、そこにはこんな牛の焼き物が山になってるの」
「神社の供え物か、どうしてそんなもの拾ってきた？」
「拾って来たのじゃないわよ、その牛ね、誰が持ち帰ってもいいんだって、そうすると牛の神様がいろいろ守ってくれて願い事も叶えてくれる、で一年が無事だったり願い事が叶うと、新しい牛を買って添えて返すの、倍返しね、だから牛はどんどん増えていく」
「ふうーん、面白い話だな」
「本当は牛を守る神様なのね、翔子のおばあさんが子どもの頃は、地元はもとより近隣の農家の人が、みんな本当の牛を連れてお参りしてたそうよ、でも今牛を飼ってる農家なんてないでしょう、神様も多

角経営、商売繁盛、家内安全、進学就職結婚までなんでも叶えてくれるって、フフフ、恭一何か願い事があるんじゃないの？」
「おい、あのなあ…しかし返すのだろう、そのためにまた来るわけにはいかないぜ…」
「心配ないわ、祭日は一月の五日、翔子が帰省するからその時返してくれるって、それに願い事が叶ったらってこと、フフ叶うのかしら」
「ふうん、そうか…」
「で、次に行ったのが隣町になるのだけどイノシシの神社」
「イノシシだと？」
「そう、神社って入り口に狛犬がいるでしょう、でもその神社にはイノシシが、狛イノかな」
「まさか」

「本当よ、でもそこは猪の神様というわけじゃないのね、ほらお稲荷さんの狐と同じようなものらしいわ」
「牛に猪だと、妙な神様がいるところだな、まさか十二支の神様が揃って…」
「そう、それよ！恭一！私大失敗！」
「何だと？」
「予定より早く帰ったでしょ、それでこの宿の人に牛や猪の神社のことを話したのよ、すると『ここにも面白い神社がありますよ、すぐ近くだからお参りされたら』って言うの、でも社殿は模型のように小さなもので後は金網の中に石ころが集めてあるだけ、何だろうこの石？と思って手にとって見たけど普通の石にしか見えないし、で帰って聞いたら『孕み石神社と言われていてね、子どもを授けてくれる

神様です、あそこの石に触ると必ず子どもが生まれますよ』って言うの」
「何だと…」
「どうする恭一、責任取ってくれるわね」

パトカーの音で目が覚めた、パトカーの警笛など珍しくもないがそこは職業柄、それに旅館のすぐ前の道路だ、夕子はまだぐっすりと眠っている、かなり大きな音だったのだが、これが若さと言うものだろうか、寝言でも言えば面白いのになどと思いながら寝顔を見ていると
「何見てるの、バカね恭一！」
「うん？」
脅かすな、本当に寝言だ、おいおいバカは無いだろう「恭一好き」ぐらい言えよ…と、またパトカーだ、

今度は一台では無い、二台、三台と盛大な音をたてて通り過ぎる、二階の窓を開けると、下の道路にはかなりの人影が出見える、みな警笛に起されたのだろう。
「何なの？」
夕子が横に並んで窓から顔を出した、あの騒音にはさすがの夕子も目覚めたらしい。
「あっあそこね、駅だわ」
何台かのパトカーが赤い光を盛大に点滅させているのは、私たちの宿より数十メートル先だ。
「駅だと？」
「そうＪＲのＭ駅、昨日私たちあそこで降りたのよ、事件ね、いって見ない？」
「よせよ、俺たちが行ってどうする、ここでは二人とも野次馬になるだけだぜ」

「ううん…そうだけど…」
「それより夕子、今日はどうするんだ？」
「翔子が車で迎えに来てくれるわ、なんでも（ふるさと村）とか言ういいところがあるんだって」
「俺もパトカーの迎えが来るはずだが、あの様子ではどうかな…」

「お客さんですよ！」の声に二階から降りてみるとB署犯罪課の課長だ。
「あっ課長さん、昨日はいろいろと…」
「いやいや、あまり協力できなくてどうも…」
昔ながらの旅館なのでホテルのようなロビーは無いが、玄関の右側に小さな応接室がある、私たちはそこに腰を下ろした。
「若いのをお迎えによこすつもりだったのですが、

ちょっと事件が起こりましてね、現場を覗いた帰りですがなんならご一緒にと思いまして」
「それは恐縮です、で、事件とおっしゃるのは？」
そのとき夕子がトコトコと降りてきて私の横に座った。
「おっ、これは！宇野さんどうしてうちの地区に泊らないのだろうと不思議に思っていましたが、なるほど警視庁の警部さんもなかなか…」
「あっ、い、いや、姪！私の姪ですよ、夕子と言います」
「そうですか！これは失礼、しかしどうして姪ごさんが？」
「大学の友人がこの地区の出身でしてね、彼女の帰省について来たのです、ちょうど私の出張と同じ日だったものですから」

「夕子ですよろしく、この叔父さん私がついていないと本当に頼りないんだから」
「……」
「こら夕子！ところで何があったのですか？」

「さてぼつぼつだな」駅員は、背伸びをしながら待合室に明かりを点けた、県境の町なのでここは下り列車の始発駅だ。窓から見ると、いつもの女高生がもう階段を上ってくる、町の中央を横切って走る鉄道は高い土手の上なので、駅舎は道路よりかなり高くなっているのだ、始発列車に乗るのはいつもこの女高生を含めて五人、いずれも県庁所在地O市よりさらに西のK市に通っている、女性が一人と男性が三人だ。改札に出るまでも無い、五人とも定期なので、いつも改札の横の窓から顔を出すだけで済ま

せる、駅員がその窓を開けようとしたときだった、
「キャア！」
と言う悲鳴が上がった、驚いて飛び出してみると、立ちすくんだ女高生の足元に一人の女性が俯けに倒れている、その首の辺りには赤黒いものがべたりと…
　残る四人の乗客もやって来た、男三人はただ立ちすくんだだけだったが、女性がすぐに腰をかがめて、倒れている女性の手首を握った、
「死んでるわ、もう死後二時間ね」
この女性の落ち着いた様子に我を取り戻した駅員が、慌てて駐在所に通報する、
「あの、貴方は？」
男性が一人、初めて口を開いた、
「私ですか、K市のS病院に勤めています。それよ

り駅員さん、列車をどうするの？早く車掌に伝えないと」
「あ、そうでした、みなさん、ともかく列車に乗ってください、間も無く発車の時刻ですから」
駅員は先に立って五人をホームに導き、変事を車掌に伝える。
「線路上の事故で無いなら、普通に運行しろと言うことだ」
操車室に連絡を取った車掌の言葉で、結局列車は三分遅れで発車した。
　駅員がホームから帰るのと、駐在所の巡査が階段を駆け上って来たのは、同時だった、
「どこですか！人が倒れているのは？」
「そ、そこですが、あっ！」
そこには誰もいなかったのだ。

「と言うわけですよ、待合室が無人になっていたのはほぼ四分、それだけの時間に死体を運ぶには車を使ったに違いない、先着のパトカーの二人はそう判断したのです、ところが、すでに起きていた駅前のタクシーの運転手が『不審な車など通りませんよ、いつもの通り四台だけ、一台は女高生を降ろしてすぐ引き返す、三台は駐車場へ、もう一人始発列車に乗る人がいますが、この人は近くなのでいつも徒歩です、なにしろ毎日のことなので、変わった車が来たらすぐ気づきますから』と言うのですね、そこで『車でないなら遠くへ運べるはずが無い、どこか近くに隠している』ということで応援を要請して来たたわけです、階段を避けて脇の坂を担いで運べば、タクシー運転手の目には触れないのですね」

「そうですか、それが後のパトカーの行列だったの

ですね」
「ええ、もう捜索は始まっています、すぐ見つかると思いますが…」

今度は夕子の方が遅かった、彼女を待って夕飯を済ませたとき、再び課長が現れた。
「宇野さん、何もタクシーを使わなくても声を掛けてくだされば」
「いや取り込み中ご迷惑だと思いまして、ところで何か進展が？」
遺体がまだ見つからないことは署で聞いている。
「それが…まだ数人残していますので、彼らの様子を見るために来たのですが、一向に…わずか四、五分の間にどこに隠したのか…」
「それ、やはり車を使ったのではないでしょうか」

と夕子が口を開いた、普通なら『それ車に違いないわよ』とでも言うところだが、相手が課長なのでいやに丁寧な口調だ、

「ほう、どうして？」

「駐車場、個人の場所が決まってるのですか、それに駅と同じ高いところにも何台か駐車していましたけど」

「いや、無料駐車場ですからね、いい場所は早い者勝ちです、高い所は本当の駐車場ではないそうですよ、元は煉瓦を貨車に積み込むための貨物専用ホームですね、今は使われていないので駐車は黙認だと言うことです」

私はこの課長が好きになった、部外者の夕子の問いに嫌な顔もせずに答えているのだ、それにまだ働いている部下をわざわざ励ましに来たのだと言う。

「駐車場に前もって車を置いておくのね、待合室が無人になった隙にすぐ遺体をその車に運ぶ、駐在さんと駅員の二人は待合室の中だし、本署からのパトカーは到着に十分以上かかってるって言うから、遺体をこっそりとビニール袋に入れるなどの時間は充分あったはず、それをトランクに隠してロック、すぐ発進してればタクシー運転手に気づかれるけど、しばらく車から離れて隠れている」

「ううん？」

「やがて始発に乗らなくてもすむ普通の通勤や通学客で駅前はにぎやかになる、家人を送って来ただけで帰る車、駐車しておく車と、駐車場も混雑するわ、そのときを狙って逃げ出してしまえば、車が一台駅前から離れても誰も変だとは思わない」

「なるほど、『車のトランクでは』と言い出した者

もいたのです、しかし駐車している車はみなロックされている、外から車中は確かめましたが、わけもなく他人の車のトランクを覗くことはできないでしょう…そうか、やはりトランクか」
「でもそれもおかしいの、女医さんらしい人、死後二時間と言ったのでしょう、そうすると三時過ぎね」
「列車の時刻から逆算すればそうなりますが、それが何か？」
「朝に近いと言ってもまだみんな眠ってる時刻ね、遺体を隠したいのならどうしてその時刻にすぐ隠さなかったのかしら、そうすれば犯行があったことすら気づかれないで済んだかもわからないのに」
「おい夕子、と、いうことは！」
私もつい口をはさんだ。

「そう、遺体は、見せる必要があったのね」
「えっ、じゃあ始発列車の五人のうちの誰かに？」
「そうかもね、でもそうでなくてもいいわ、どうせＴＶのニュースや新聞に出るでしょう、女性が、Ｍ駅で、死んでいた、だいじなのはこの三点、この三点で何らかの意味がわかる人がいるはずだと思うの、その人に宛てたメッセージ」
「そうか、そう言うことで…」
「でもまだ疑問が残るわ、見せるためならなぜまた隠したのかしら、ねえ課長さん、女医さんらしい人、本当は医師ではなかったのでしょう」
「えっ、どうしてそれが？」
課長は、もうすっかり夕子の話に引き込まれている。
「病院の医師って夜勤が多いのじゃないかしら、入院患者のためとか救急車で運ばれて来る患者のた

めとか、これは看護師も同じね、だから医師か看護師だったら毎日同じような通勤ができるはずは無いと思うの、歯科や眼科のようにそれほど救急に関係しない分野だとしても、早朝の始発列車に乗る必要があるところから通うなんて遠すぎるわ」

「その通りでした、遺体を落ち着いて診たのは彼女だけだと言うことですから、すぐ勤務先のK署に依頼して聞いてもらったのですが、病院の仕事は事務員でした、ただもとは看護師だったのだが、親の介護で家を離れられなくなったため、やむを得ず事務に変えてもらったのだそうです、看護師のとき亡くなった人は何人も見ているので今朝の人が死んでるのはすぐわかったと言うことです」

「死亡はすぐわかるわ、脈を診たと言うのでしょう、でもただそれだけで死後二時間なんてわかるかし

ら、恭一、早川さんだったらわかると思う？」
「うん…いくらベテランの早川でも無理だろうな、二、三時間だなという程度なら、彼だったらわかるだろうが」
「ねえ、待合室で倒れてたと言う女性、本当に死んでたのかしら…」
「なんだと！？」
「もと看護師だった人、『死後二時間』などと言って、女性はすでに死亡していることを回りに印象付ける、そして全員をうまくプラットホームに誘導する、倒れていた女性はすばやく立ち上がって身を隠す」
「ううん…」
「どこかの路地にでも隠れたのじゃない、そこで血のように見えたものをふき取って化粧を直す、そし

て駅前がにぎやかになるのを待って立ち去る、タクシーね、列車でもいいけど、駅員に服装を覚えられている危険があるわ、着替えを入れるような物は目撃されてないんでしょう、それに外での着替えは無理だと思うし、でも化粧を直す程度のものなら仰向けの腹の下でも隠せるわ」

課長は、突然携帯を取り出した。

「私だ、すぐタクシーの運転手に聞け、今日見かけない女性を乗せなかったかと言うことだ」

続いて本署を呼び出す、

「病院の事務員の女性だ、K署は彼女の住所も聞いてくれているだろう、誰かを派遣しろ！いや待て、私が行かないと事情がわからないな、すぐ帰るから待っていろ」

「あら帰らなくても彼女の家はこの地区のはずよ、

通勤はここの駅を使ってるんだから」
「あっそうでした！おいすぐ来てくれ、私は現場に近い旅館にいる」

翌日二人で新幹線乗にった、翔子はまだ二、三日実家に止まると言う、夕子は『たった二日で帰らなくても私の家に泊まればいいじゃないの』という翔子の誘いにのるつもりのようだったが、私がかなり強引に一緒に帰るように主張したのだ、いったん事件に首を突っ込んだ夕子が、のんびり友人と二人で過ごすはずが無い、そうなると危なくておいておけないのだ、
「仕方ないわ、恭一私がいないと本当に頼りないのだから」
お互いに自分が保護者のように思っているのだか

ら世話はない。

B署犯罪課の課長から封書が届いた、ファックスでもメールでもないのは個人宛だったからだろう。

・・・・駅で倒れていた女性ですがタクシーでの行き先は、あの事務員の家でした、彼女は夫の暴力から逃れて事務員のところにいたのです。ところが夫に知られてしまった、「もう行くところが無いわ」「いっそのこと死んだことにしたら」と、言うわけであの馬鹿げた芝居をうったとのことです。

女性は死亡していないことから、誰かに宛てたメッセージだと言うことまで、姪ごさんの推理は全て当たっていたました。おかげで私たちも無駄な捜査を続ける愚行から救われ、感謝しています。

それにしても凄い姪ごさんですね。

・・・・・・

追

事件を解決したのは、宇野警部の姪ごさんだと話したところ、警視庁に出向いたことのある刑事が「警視庁には二十も歳の離れた女性とオシドリのような関係の警部さんがいると聞きましたよ、確かその女性の名前は夕子さんだったと…」まあ姪ごさんと同名なのは偶然でしょう?…また来署していただき、捜査の秘訣などお話しいただければ、その際はぜひ姪ごさんとご一緒に。

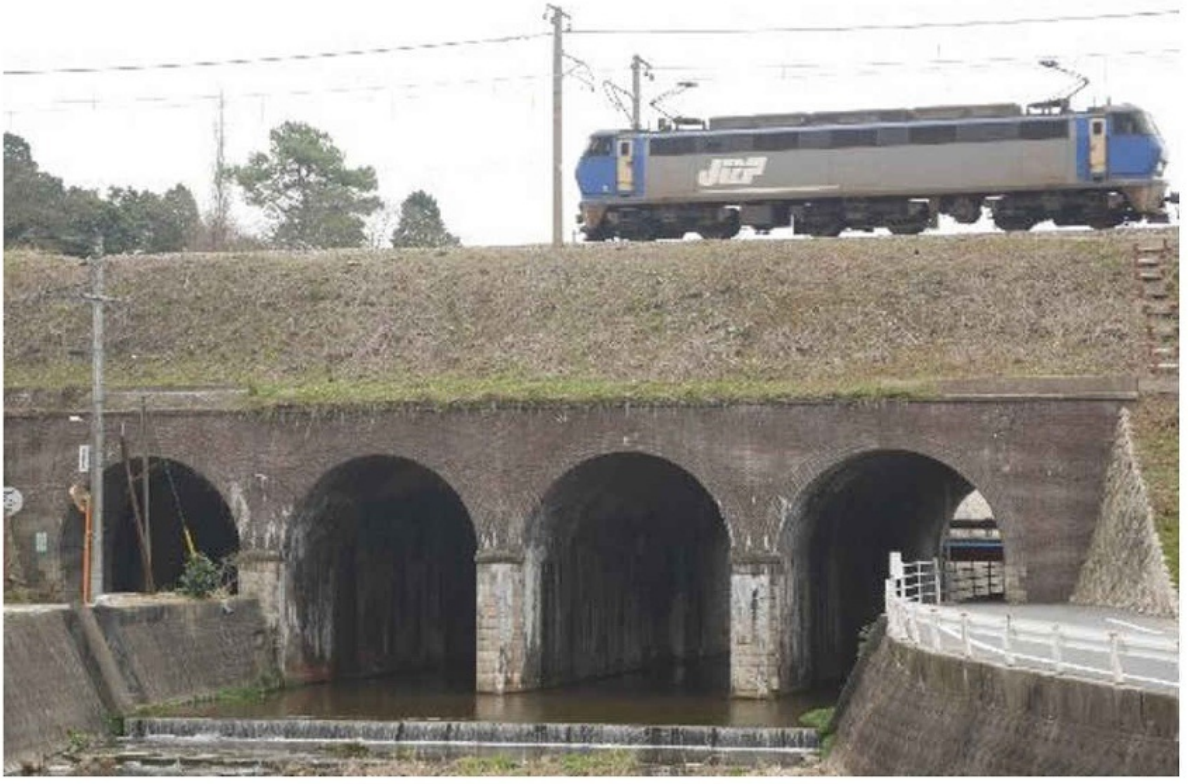
夕子さんによろしく。

敬具

おわりに

なんだ…と言う結末、ごめんなさい！

今回は実際に旅行した地を背景にしました、そのため牛や猪の神社も子どもを授けてくれる神様も実在します、ただし神社巡りをしたわけでなく、横溝正史が疎開していた家や「本陣殺人事件」のロケ地などを訪ねる旅のついでに立ち寄った町です、土手の上を走るＪＲの架橋が昔ながらの煉瓦造りで面白いと聞いていたためですが、四連のアーチ型のトンネルは確かにちょっと珍しい、四連ではありませんが、この町には、こんなトンネルが他にも四ヶ所ありました、四連は県の文化財指定？だそうです。


JR

贋作幽霊待合室

http://p.booklog.jp/book/96618

著者 : tontokaimo39
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/96618

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/96618

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ